定常型社会における農村社会の課題

Agenda for Rural Communities in Steady-state Society

広 井 良 典*

Yoshinori HIROI

I はじめに——定常型社会という視点

閉塞感が現在の日本社会をあらゆる局面において覆っている、ということは改めて言うまでもないことだろう。そうした閉塞感の背景のひとつには、たとえば高齢化の中で年金制度が破綻するとか、医療費や介護の負担で経済が失速する等といった、社会保障制度の将来に対する不安というものがある。しかしより根底的には、戦後の、あるいは明治期以来の日本が一貫して追求してきた「(経済)成長」ないし「物質的な富の拡大」という目標がもはや目標として機能しなくなった今という時代において、それに代わる新たな目標や価値を日本社会がなお見出しえないでいる、というところに閉塞感の根本理由があるのではないだろうか。

では、私たちがこれから迎えようとしている社会あるいは時代は、いったいどのようなイメージのものとして描きうるのだろうか。ここで私が問題提起の意味を含めてまず提案したいのは、「定常型社会」という基本コンセプトである。「定常型社会」とは、さしあたり単純に述べるならば、「(経済)成長」ということを絶対的な目標としなくとも十分な豊かさが実現されていく社会ということであり、「ゼロ成長」社会といってもよい。これからの日本社会の本質は、まずもってこの「定常型社会」ということに集約されると私は考えている。

なぜ「定常型社会」なのか？ 基本的には、経済成長の究極の源泉である需要そのものが成熟ないし飽和状態に達しつつある、ということであるが、関連する重要な要因として次の2点がある。

第一は、高齢化ないし少子化という動きと不可分のものとして、人口そのものが2005年から既に減少に転じているということであり、第二は環境問題との関係である。資源や自然環境の有限性が自覚されるようになり、経済活動それ自体の持続性ということを考えても、経済の規

模の「定常性」が“要請”されるようになった。このように、定常型社会とは実は「高齢化社会」と「環境親和型社会」というふたつを結びつけるコンセプトでもある。

さて、「成長」や「拡大」ではなく「定常型社会」ということを基本的な出発点とすると、私たちは多くのドグマや混乱から解放される。逆に言うと、「成長し続けなければならない」という大前提にとらわれているために、私たちはいかに多くのものを失い、また無用の落胆をし犠牲を出しているだろうか。ムダとしか思えないような公共事業や、それに伴ってどんどんツケとして回される将来世代への負担の話は言うまでもないし、もともと近年の不況も源をたどればバブル期において需要の実体がないところにマネー志向が独り拡大を続けたことが大きい。定常型社会ということを経済のコンセンサスとすることで、私たちは多くの意味のない政策から自由になることができるし、より重要なこととして、まったく新しいこれからの社会像や価値がそこに開けてくるのである。

そして、こうした定常型社会においては、地域や農村ということが、これまでの高度成長期とは全く異なる形で新たな意味や価値をもつようになる。それにいち早く気づき始めているのは、次に述べるように若い世代であるように思われる。

II 若い世代のローカル志向

若者の「地元志向」ということがしばらく前から言われるようになってきているが、私自身の身近なところを見ても、学生たちの「ローカル志向」ということが以前にも増して確かな流れになっていると感じる。たとえばゼミの学生で「愛郷心」ということを重視し、衰退していく地元の町や地域をなんとか再生させたいといった関心をもつ者が明らかに増えている。静岡出身のある学生は“静岡を世界一住みやすい場所にする政策を掘り下げる

*千葉大学 Chiba University

Key Words：1) 定常型社会, 2) ローカル化, 3) 若者政策, 4) 経済成長と幸福, 5) コミュニティ

こと”をゼミ志望の理由に挙げていたし、新潟出身の別の学生は農業の再生を大学時代のテーマの柱としていた。

最近の象徴的な例では、学生時代はイギリスに留学するなど国際的なテーマに関心をもっていた女子の学生が、あるインターンシップで滞在した長崎県五島列島の小値賀島の魅力に感銘を受け、卒業後2年ほどは東京の丸の内まで働いていたが、先日会社をやめて小値賀村に移住して暮らすようになったという出来事があった。

以上のようなことを含め、こうした若い世代のローカル志向を、“内向きになった”とか“外に出ていく覇気がない”といった形で批判する議論が多いように思うが、それは全く的外れな、誤った意見だと私は思う。

海外に“進出”していくのが絶対的な価値のように考え、また「“欧米”＝進んでいる、日本やアジア＝遅れている」といった固定的な観念のもとで猪突猛進してきた結果が、現在の日本における地域の疲弊であり空洞化ではなかったのか。むしろ若い世代のローカル志向は、そうした日本や地域社会を“救って”いく萌芽的な動きであり、それらを批判するのではなく、全く逆にそうした動きへの様々なサポートや支援のシステムこそが強く求められている。

ちなみに、農村に限ったものではないが、そうした支援政策の一つとして私は「若者基礎年金」という政策を提案してきた（広井（2006））。農村に関しては、周知のように地球緑化センターの「緑のふるさと協力隊」（1994年度～）、農林水産省の「田舎で働き隊」（2009年度～）、総務省の「地域おこし協力隊」（2009年度～）等があるが、これらは財政規模を含めて大幅に拡充される必要があるだろう。

ところで少し角度を変えてこの話題を考えてみると、最近アメリカの学者ダニエル・ピンクが『モチベーション3.0』という本を出して話題になった。彼の議論では、人間のモチベーションには3つの段階があり、「モチベーション1.0」は（原始時代のような）生存のために働いたり行動すること、次に「モチベーション2.0」は、（従来の資本主義社会が典型であるように）“信賞必罰”のもとで自己の利潤を最大化しようと行動することだが、現在そしてこれからの時代に人々の中心的なモチベーションとなっていくのは、むしろ「社会に貢献したい」とか「面白いから」「正しいことだから」といった、損得といったレベルを超えた動機づけであるという。ピンクはその場合のキーコンセプトとして、「自律性」「熟達」「目的」という3者の重要性を挙げている。

読んでいる読者の方はすでに感じられたかもしれないが、こうした「モチベーション3.0」の議論は、上に挙

げたような筆者の身の回りの若い世代の行動パターンや関心にかなり重なっている。

私がここでダニエル・ピンクの議論を持ち出した一つの理由は、いわば“資本主義の権化”たるアメリカのような社会において、労働や人間の動機づけについてのこうした議論が大きく浮上していることの、ある種のパラドクスめいた妙味からである。類似の議論は他にもあって、経済学者リチャード・フロリダは著書『クリエイティブ資本論』の中で、これからの資本主義においては文化、アートなど「創造性」を軸とする分野がその駆動力になっていくが、その場合①労働に関する「非貨幣的な（貨幣に換算できない）動機づけ」が重要なものになっていく、②「コミュニティ」や「場所」というものが本質的な意味をもつようになるという議論を展開している（フロリダ（2008））。「非貨幣的な動機づけ」や「コミュニティ」といったことは本来資本主義が内包しない要素であり、これは一種の“資本主義の反転”論とも言えるだろう。つまり資本主義というものが進化し、物質的な豊かさが飽和し、人々の関心がむしろ「非物質的」な価値に移っていく中で、コミュニティやローカル性や非貨幣的な動機づけといった、資本主義を超える領域が大きく生成していくのである（広井（2009）参照）。

III 経済成長と幸福

以上、若い世代のローカル志向という話から初めて若干の議論を展開したが、ここでもうひと回り視野を広げ、農村あるいは地方を含めた日本社会全体のあり方を、経済の成熟化あるいは「ポスト成長」の時代という大きな時代構造の変化の中で考えてみよう。

「GAH」という言葉をご存じだろうか。これは東京都の荒川区が数年前から掲げている目標で、「グロス・アラカワ・ハピネス」、つまり「荒川区民の“幸福”の総量」という意味であり、これを増大させることを区政の目標にしようというわけである。同区では荒川区自治総合研究所という財団を最近設立したが、そこでもこの「GAH」が研究テーマになるという。

もちろんこれは、近年多くの人々の関心を集めるようになっていく「GNH」をもじったものである。「GNH（グロス・ナショナル・ハピネスつまり国民総幸福）」とはブータンが掲げている国の目標で、いわゆるGNPではなく、経済の規模に還元できない人々の「幸福」を増大させることを国の目標にするというものだ。

ところで、そもそも経済成長と人々の幸福にはどのような関係があるのだろうか。

こうした点に関し、最近では様々な研究を通じ、経済

発展の度合いが一定水準（たとえば一人当たり年間所得が1万ドル程度）を超えると、経済成長と人々の「幸福」感や生活満足度との間の相関がほとんど見られなくなることが示されるようになってきている（フライ他（2005）参照）。そしてGDP以外の要因、たとえばコミュニティ（人と人とのつながり）のあり方や所得の平等度、自然環境との関わり等といった要素が人々の幸福や「生活の質」の向上にとってむしろ重要になってくる（図1参照）。

こうした「経済成長と幸福」をめぐる研究や議論は、冒頭で述べた定常型社会という「新しい豊かさ」をめぐるビジョンとも呼応することになる。

そして、ここで重要なのは、こうした定常型社会においては以下で述べるように「空間」的な視点、あるいはそれぞれの地域の固有の価値や多様性が重要になるという点である。

IV 「時間的解決」から「空間的解決」へ

議論の手がかりとして（表）をご覧ください。これは、さしあたり日本における様々な地域を「A. 大都市型」「B. 地方都市型」「C. 農村地域型」に大まかに分けた上で、それぞれの地域の「問題・課題」と「資源・魅力」を概括したものである。

簡潔に内容を確認すると、まず大都市圏においては、表にも示しているように、格差、コミュニティの不在や孤独、劣悪な景観、「自然」の不在、過労、ストレス、長い（詰め込みの）通勤時間・距離、住環境の悪さ等々、“ありとあらゆる”と言えるような様々な問題が存在している。“現代社会”の課題として語られるものの大半は、概ねここに属するものである。

にもかかわらず、多くの人々がこうした大都市圏にやって来たのは、そうした無数の「問題・課題」の存在と同時に、それをなお上回るような何らかの「資源」や“魅力”がそこに存在している（と思われている）からである。それは経済活力（「職」を含む）、文化やファッション、情報、知識等々といったものである。しかし少し距離を置いて考えてみると、これらの「資源、魅力」が、先ほど挙げた多くの問題・課題を本当に上回るものであるかどうかは、実ははっきりしないというのが実際のところだろう。

図1 経済成長と幸福度との関係（仮説的なパターン）

Fig.1 Economic Growth and Happiness (Hypothetical Pattern)

表1 異なる地域における問題・課題と「資源」・「魅力」
Table Problems and Resources in Different Types of Communities

	問題・課題	「資源」・「魅力」
A. 大都市型 (中心部-郊外)	格差, 社会的排除, 失業 (↑生産過剰) コミュニティの不在, 孤独 劣悪な景観, 自然の不在 過労, ストレス 長い通勤距離 (↑スプロール化) 劣悪な住環境	経済活力 文化やファッション 情報, 知識
B. 地方都市型 (人口数万~数十万程度)	中心部空洞化 製造業(工業)の衰退 景観破壊や虫食いの開発	ゆとりある空間や働き方 比較的広い住空間 一定のコミュニティ的紐帯 自然との近さ
C. 農村地域型	人口減少(～限界集落) 若者流出, 高齢化 雇用減少, 経済衰退	自然 食料等の資源 ゆっくりと流れる時間

一方、Bの「地方都市型（人口数万～数十万程度）」の地域はというと、たしかに様々な問題を抱えている。表にも示しているように、それは中心部の空洞化、製造業の衰退、一部の開発に伴って進行中の景観破壊や虫食いの開発等といったものである。しかし同時に明らかなことだが、こうした地域は先ほどの大都市圏にはない確かな「資源、魅力」を持っている。まず何ととってもゆとりある空間や働き方。比較的広い住空間、一定のコミュニティ的なつながり、そして「自然」の近さ。余談ながら、筆者の実家は岡山市の中心部の商店街にあるが、“シャッター通り”化といった問題点を踏まえた上でなお、首都圏などと比べて全体として感じるのはむしろ生活の「豊かさ」である。

さらにCの「農村地域型」はどうか。問題・課題のほうは、ある意味ではBのものがより顕著になって、人口減少（～限界集落）、若者流出、高齢化、雇用減少、経済衰退等々といったものであり、しかし同時に明らかな資源・魅力として、何より「自然」、そして環境問題へ

図2 地域再生・活性化に関する全国自治体アンケート調査（2010）より
Fig. 2 Questionnaire Study to Municipalities regarding Local Revitalization (2010)

の関心の高まりもあって注目されている食料・自然エネルギー等の資源、「ゆっくりと流れる時間」等々がある。

いま確認したことを出発点にして、そこから次のようないくつかの手がかりが得られるだろう。

まず、「ある地域に不足しているものが、他の地域では十分に（ないし過剰に）存在している」という事実である。大都市圏においてまさに不足しているもの、存在しないものが、地方都市や、農村地域においては半ば過剰なほど存在している。逆もまたしかりである。それらの「足りないもの」は、夢のような手の届かない存在ではなく、少し空間的に移動すればいくらかでも存在していたりする。ではなぜこれらがもう少しバランスよく配分されないのか？

様々な理由が考えられようが、特に大きいのは、「時間軸」に沿って問題が改善・進歩していくとの発想が強かったことではないだろうか。たとえば首都圏で働くサラリーマンにとっては、通勤電車の混雑と長い時間は耐え難いもののはずだが、それも将来の幸福のための“一時的な手段ないし通過点”であり、やがて自らの所得が上がり中心部により近いところに住居が買えたり、あるいは日本全体が経済発展する中でそうした通勤・交通問題も解消されることになることを期待して、“今は我慢しよう”という発想である。これがここで言う「時間的な解決」という発想に他ならない。

しかし、少なくともすべての問題がそのようには解決されない、ということに多くの人が気づき始めているのが現在ではないか。つまり、時間的な解決という従来の発想——それは「（経済）成長による解決」という発想とも、また中央集権ないし東京への一極集中という構造とも重なる——では立ち行かない問題がむしろ多くなっており、それは経済の成熟化・定常化という時代の構造

変化と対応している。つまり、すべての都市や地域が“東京のようになる”ことが「生活の質」の上昇につながるわけでもなく、また望ましくもないことを多くの人が感じつつある。むしろ各地域のローカルな風土的・文化的多様性や固有の価値を再発見し、しかもそれを自立的なユニットとして考えていくという方向が、成熟化・定常化の時代の基調になっていくだろう。象徴的に言えば、「時間的な解決」から「空間的な解決」、あるいは時間軸を中心にした見方から空間軸を中心にした見方への転換ということが重要になっており、そちらに軸足を移していくということが、いま求められているのではないだろうか。

ちなみに、昨年（2010年）7月に私は全国の市町村を対象に地域再生・活性化に関するアンケート調査を行った（全国市町村の半数（無作為抽出）及び政令市・中核市・特別区で計986団体に送付。返信数597（回収率60.5%））。その中での「日本は2005年から人口減少社会となっていますが、そうした時代状況における今後の地域社会や政策の大きな方向性として、貴自治体では以下のうちいずれが基本となるとお考えでしょうか。」という設問に対しては、（図2）に示されるように、大半の市町村が「定常型社会」的な方向を追求していくとの回答だった。こうしたビジョンの実現のための政策が求められている。

V おわりに——地域からの離陸と着陸

振り返れば「成長」の時代とは、GDPの拡大といった「大きなベクトル」が支配的となり、各地域が“ひとつの方向”に向かい、すべてが“進んでいる－遅れている”という一元的な座標軸に位置づけられるという、い

わば「時間」優位の時代であった。

私たちが迎えつつある成熟あるいは定常化の時代においては、人々はそうしたベクトルから解放され、むしろ各地域の風土・伝統・文化といった固有の価値や多様性に関心が向かうという、「空間」が復権する時代となる。それは飛行機にたとえると、市場経済の拡大とともに地域コミュニティや土地といったものから一貫して“離陸”してきた人々が、もう一度そうした場所に“着陸”していく時代でもあるだろう。

その兆しや様々な試みは、冒頭でふれた筆者の身近の若い世代の動きにも示されるように、あるいは各地での様々なNPOやコミュニティビジネスや社会起業家等々の試みに見られるように、既に“百花繚乱”のように日本の各地で始まりつつある。

そうした展開に私たち一人ひとりが各々の立場に関わ

っていくとともに、それらを支援し、望ましい地域社会のありようを実現していくための分野横断的な公共政策がいま強く求められている。

参考文献

- 1) 広井良典 (2001) : 『定常型社会 新しい「豊かさ」の構想』, 岩波新書.
- 2) 広井良典 (2006) : 『持続可能な福祉社会』, ちくま新書.
- 3) 広井良典 (2009) : 『グローバル定常型社会』, 岩波書店.
- 4) 広井良典 (2009) : 『コミュニティを問いなおす—つながり・都市・日本社会の未来』, ちくま新書.
- 5) ブルーノ・S・フライ他 (2005) : 『幸福の政治経済学』, ダイアモンド社.
- 6) リチャード・フロリダ (2008) : 『クリエイティブ資本論』, ダイアモンド社.

Key Words : 1) steady-state society, 2) localization, 3) youth policy, 4) Economic Growth and Happiness, 5) Community